

NOW IS.

いま
宮城は現在も
いま
現実に
立ち向かう。

Vol.
16
August, 2017

ナウイズ
毎月11日発行

小林
武史
in 石巻

失った場所だから 出会うことができる。



「はまさいさい」で浜のお母さんたちとともに。

想像して創造できる場所。石巻の「循環」を 小林武史さんとともに感じる。

放り出されたままの
自然の中に、アート。

長く続いた梅雨の終わり。雨の音を聞きながら、小林武史さんに会うために石巻市・牡鹿半島に向かいました。小林さんは今「Reborn-Art Festival」の実行委員長として、数か月間、石巻と東京を行き来しています。「アート」「音楽」「食」をテーマに掲げた総合祭「Reborn-Art Festival」。石巻市中心部と牡鹿半島をメイン会場に、平成29年7月22日〜9月10日までの51日間、開催されます。

「Reborn」には「再生」「Art」には「技術」という意味を含めました。石巻市は、いろいろなことを想像し「創造」できる場所。これは、都市部だと難しい。たくさんものを失った場所だからこそ、予測できないものに出会える場になったのではと感じています。「予測できない出会い」は今回の大切なテーマ。アート作品は、普段行かない場所に展示されているものも多くあります。コン



はまさいさい
新鮮な魚や野菜をつかった郷土料理を日替わりで。



投げ捨てられた「自然」失せたものを入れるドーム
岩井優作。海岸や山の廃棄物を利用した作品。イベント期間中も継続して変わり続けます。



石巻に巨大なマユとキノコが出現
増田セバスチャン作のツリーハウス。プランコに乗って、海を眺められます。



こじか隊とともに
Reborn-Art Festivalは、市民や全国のボランティア「こじか隊」に支えられています。

セプトアートである「White Deer (Oshika)」も、港を抜け、里山を歩いた先にある浜にあります。「ここには、手つかずで放りだされたままの自然が残っています。海と里山、両方に出会ってほしい。」

張ってくれるのがいいですね。現在の石巻市は、「手つかず」なところが、すごくいい」と小林さん。出ていく人も入ってくる人もいて、隆盛と衰退、両方見えますよね。今、東京は、中身を失ったまま経済だけがすごい勢いで回っている。それに比べて、石巻は息づかいが楽なんです。食も文化も素晴らしい。ライブをする、いい即興がどんどんあふれてくるんです。アートや食を入口に、石巻市の魅力と再生を感じにきてほしいと思います。」

沼田佐和子

「White Deer (Oshika)」の足元には、全国各地のシェフらが腕をふるうレストランをオープン。浜の女性が郷土料理をふるまう「はまさいさい」も営業を始めています。「朝ね、漁師さんが持ってきたエイを天ぷらにしたのよ。あと、鮭、食へてっ！」。はまさいさいでは、お母さんたちが矢継ぎ早に料理をすすめてくれます。「そうそう、今、鮭がおいしいんだよ」と小林さんは舌鼓。「浜のお母さんも漁師の人も、手伝おうかって来てくれる。この食堂を自分ごととして頑

PROFILE

小林 武史
こばやし たけし



音楽プロデューサー、キーボーディスト。Mr.Childrenをはじめ、日本を代表する数多くのアーティストのプロデューサーを手がける。平成15年に自然エネルギー推進を掲げた「ap bank」を設立。東日本大震災後は被災地に赴き、炊き出しやボランティアの受け入れ体制の構築などに尽力。支援だけに留まらない幅広い活動を行っている。

a walk! this town!

この街の“今”を探索

牡鹿ビレッジ

Reborn-Art Festivalの牡鹿半島の拠点施設。地元の女性たちが、地場の食材を使った料理を提供する「はまさいさい」、著名シェフらが腕を振るレストラン「リボンアート・ダイニング」、芝生広場やインフォメーションセンターが設置。

旧観慶丸商店

1930年に石巻市初の百貨店として完成。2015年には洋風の木造建築として石巻市指定文化財に。津波で浸水しましたが、今年2月に修復工事が完了し、Reborn-Art Festivalの展示会場のひとつとなっています。今後も街中の文化発信拠点として活用されます。

おしかのれん街

牡鹿半島鮎川浜の仮設商店街。被災した商店など16店舗が、復興を願い2011年11月に開設。「捕鯨の町鮎川」ならではの、鯨の歯を使用した伝統工芸品や鯨肉の郷土料理のほか、金華山漁場でとれた魚介類などを楽しむことができます。

牡鹿半島食堂いぶき

津波で被災した築約80年の古民家を、緊急災害支援を手がける一般社団法人オープンジャパンが4年かけて改修し、今年4月に食堂としてオープン。地元食材を楽しみ、地域住民と牡鹿半島を訪れる人々の交流の場として活用されています。

石巻ASATTE(アサッテ)

石巻の水産加工品を中心とした地場産品や県内の作家が手がける生活雑貨、レストランカフェなどの複合施設が、石巻市中心市街地に2016年11月オープン。料理教室なども開催し、新名所となっています。



石巻市牡鹿半島鮎川地区(おしか御番所公園からの眺望)

PROFILE

石巻市 復興政策部 地域協働課
こいで ゆうた
小出 祐太 さん
平成28年4月から
千葉県千葉市より石巻市に派遣

地域を担う若い世代の役に立ちたい。



して地域防犯に関わったりと、多岐に渡ります。

中でも難しさを感じているのは、新市街地のコミュニティ形成に関わる仕事。千葉市では、住民税の業務を担当してましたが、「コミュニティづくりなど地域住民と深く関わる仕事は初めてでした。」新市街地には、いろいろな地域から住民が集まっています。これから暮らす街に対して「こういう街にしていきたい」という想いを持った人が多いので、意見がぶつかることもある。その調整をするのは、苦労が多いですね。でも、そういった意見交換があった上で、新しい街ができていくのだと思います。小出さんは話します。



自治会形成の説明会や、地域防犯の集まりにも足を運ぶ。



初めて石巻を訪れた時に来た日和山公園は、今でも定期的に訪れる場所。

小出さんが千葉県千葉市からの派遣職員として石巻市にやってきたのは、平成28年4月。千葉市以外の地域を見ることで地方公務員としての経験を積みたいと思い、以前訪れる機会があった石巻市への派遣を希望したと言います。石巻市に着任してから1年数カ月。勤務する石巻市役所の隣には石巻市立病院が再建され、5年半ぶりに診療を開始したほか、新市街地には住宅や店舗が増えるなど、刻々と変化し続けています。特に仕事で関わりが深い新蛇田地区の変化は強く感じています。街づくりの過程が見られる機会はそうそうないこと。貴重な経験です。

「あと何年かしたら、インフラや住宅整備などハード面は落ち着くかもしれないですが、私が関わっているコミュニティ形成などソフト面の仕事は、道のりが長いと感じています。派遣職員は基本的に期限付きなので私が来年もここにいられるとは限りません。その私ができることは、これからも石巻市と歩んでいく若い世代の職員が地域を担っていきけるように、微力ながらも自分の経験や仕事のやり方、考え方を伝えていくことだと思います。」派遣職員がいなくなった後の石巻市を想いながら、小出さんは奔走し続けます。

Support Power

記者の視点



筆者プロフィール
河北新報社石巻総局
すずき たけや
鈴木 拓也 さん
1983年生まれ、神奈川県出身、2007年入社、石巻総局

ツール・ド・東北で被災地の変化を実感

日 差しを浴びながらクロロスバイクで走るのが心地よい季節になった。

雑誌の特集を読んでスポーツバイクに興味を持ったのは平成27年の夏。同じころ、東日本大震災の復興支援を目的とした自転車イベント「ツール・ド・東北」やフー、河北新報社主催の本社取材班の一員となった。

当時、気仙沼市から石巻市に向かう95キロの新設コースが大会の目玉だった。特集紙面でコースを紹介するため、買ったばかりのクロスバイクで試走した。

至る所に津波の爪痕が残り、コース沿いにプレハブ仮設住宅も並んでいた。「復興」という言葉はほど遠かった印象がある。

翌年、石巻総局に異動となり、再びツール・ド・東北の取材に加わった。

牡鹿半島を巡る新設コースの取材で、森の中を駆けるライダーの後を追った。海岸線に残る住宅跡や崩れた堤防。被災の痕跡がまだ所々に残る一方、山を切り開いた斜面には新しい宅地が完成していた。「復興が少しずつ形になっていった」と語る参加者の感想がしっくりきた。

被災地の表情は刻々と変わる。それを伝えるのはわれわれの使命だが、実際に現地に足を運び、自分の目で確かめなければ分からない現状もある。

ツール・ド・東北のような復興支援イベントは「被災地の今」を肌で感じる良い機会だ。今年は9月16、17日に開かれる。

「あの街はどうなったのだろう。」傷付いた地域を気に掛ける思いが、復興を支えるエネルギーにもなる。

暮らしの中に防災を！

NOW IS.

防災

宮城県各地で行われている防災・減災の取り組みから、日々の備えに生かせるヒントを探していきます。

普段からやっていないことは、災害時にもできません。また、防災のために何か特別なことをしようとして構えてしまうと、負担に感じることも……。例えば、いつもの食事や毎日の運動に防災につながる仕掛けを入れるなど、日常生活の中にある防災は覚えやすく取り組みやすいのがポイントです。今回は「仙台八木山防災連絡会」の取り組みから、防災を日常に取り込むヒントを学びます。



【お知らせ】平成29年12月9日(土)に、世代や立場を超えて防災について考える「第6回 地域防災シンポジウムin八木山」を開催。その他にも様々なイベントを企画中。詳しくは八木山市民センターのHP等でお知らせします。



防災を日常にするヒント

- 1 いつもの食事を、災害時にも使える調理法で！
1個の固形燃料で少量の米を炊いたり、ひたひたの水を入れたフライパンでパスタを茹でたり、いつもの食事の調理法を時々変えるだけで、災害時にも使える調理法が身に付きます。
- 2 毎日の運動で、災害時の初期動作を覚える！
地震の時は頭を守る。火事の際は口をおさえるなど、災害から身を守る動作を体操として毎日の運動に取り入れましょう。“ぼうさいダンス”のように体を動かすことで子どもも楽しく覚えられます。

防災を日常に取り入れる“仙台八木山防災連絡会”

平成20年4月の発足以来、地区の町内会、学校、企業など42団体が参加し、地域の防災・減災力を高める活動に取り組む「仙台八木山防災連絡会」。災害時の初期動作を歌とダンスで覚える“ぼうさいダンス”で地域をつないだり、イベントの防災減災コーナー展示で災害時にも使える調理法を提案したり、防災を特別なこととして捉えるのではなく、楽しく日常に取り入れる活動を続けています。

【取材協力】
仙台八木山防災連絡会
ボウサイ仮面・ボウサイL(レディ)

愛と命の伝道師。いつも八木山地域と子どもを見守っている、仙台八木山防災連絡会のニューヒーロー。イベントにも登場！



地域の課題は可能性。 震災をプラスに 浜の魅力が発信する。



(上) 地元の人に戻ってこられる場を、と始めた「はまぐり堂」。(最左) 建設を進めているマリンアクティビティの拠点施設。(左) 2012年3月に亀山さんが描いた蛤浜の未来の想像図。

集落とともに生きる循環型のプラン

亀山さんは、生まれも育ちも石巻市牡鹿半島の蛤浜。九州の大学に行きましたが、宮城県水産高校の教員となり浜に戻りました。「震災までの暮らしは、私にとってとても理想的な暮らしだったんですよ。浜で暮らして、職場までは車で10分で着くし、近所の人ともよくできて、それが、津波によって妻と子ども、ふるさととも一瞬で全部奪われた。ここで何もしなかったら、ワリに合わない、震災があったらから今があるって言えるようになる、と思ったんです」。

「蛤浜プロジェクト」がスタートしたのは2012年3月。久しぶりに帰った浜で、これからの浜がどうなっていくのか不安に思う人々と、震災後も変わらず美しい海を見て「この暮らしをここで途切れさせたくない」と思ったそうです。少ない世帯数でも暮らしを継続する仕組みを考え、「暮らし」「産業」「教育」を柱に、交流人

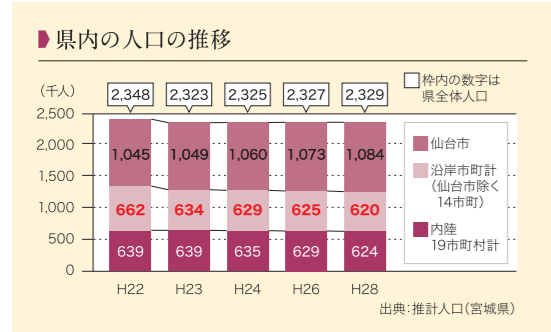
口の増加を目指しました。季節の食材を提供するカフェ&レストラン、子どもも大人も海に親しめるアクティビティ、浜の暮らしを体験できる宿。「立地が悪すぎる」という声も「必ず響くはずだ」と信念を貫き、5年目でほぼすべての計画を実現しました。

一方で、課題も生まれました。カフェの利用者は年間1万5000人。急激な変化に、浜の暮らしが変わった、と住民の戸惑う声が高まったのです。亀山さんは、一度立ち止まり、最初の理想に立ち返ります。「一番大事にしたいのは、地域の人に喜んでもらえるかたちで、蛤浜を残していくこと。交流人口を増やすだけではなく、本当の幸せとは何か、それをどうやったら実現できるのか、考えました」。たどり着いたのは、地域課題を事業にすること。未利用の山や海の資源、獣害が問題になっている鹿の活用など里山の資源が循環するプランを描きます。「地方には活かされていない資源がたくさんあって、それらを今の時代に合わせた形にすることが大切だと思います。世界的な料理人や職人もそれに

注目しています。そのために不可欠なのは、『仲間』です」と亀山さんは言います。「共感し助け合える仲間が最も大切です。地元の方とは、これまで以上にしっかり話をし、ともに進みたい。一緒に生きていきたいと言ってくれる人も現れ、先日この浜で結婚式を挙げることができました」。地に足を付けて地道に活動する中で、本来の浜の暮らしの良さを引き出していききたい。その想いで一步一步、着実に前に進んでいます。

今、石巻市は二極化しているように感じると、亀山さんは言います。『この街は終わりで』って暗い顔の人たちがいる一方、『石巻から世界を目指そう』と熱く語る人たちもいます。震災で衰退した事業もありますが、その反面、志を持った人が増え、一流の人たちと関わるなど、チャレンジできるフィールドも近くなりました。

「震災があって、ふるさとがなくなるかもと思った。明日死ぬかもと思った。運良く残された命。だったら、前を向いて地域のためになることや、ワクワクや可能性を事業にしたいって、いつも思っています」。



PROFILE
一般社団法人はまのね 代表理事
かめやま たかふみ
亀山 貴一さん
1982年、石巻市蛤浜出身。宮崎大学と石巻専修大学で水産を学び、震災前までは宮城県水産高校で教師として勤務。2013年に退職し、一般社団法人はまのねを立ち上げ、プロジェクトの活動に専念している。

INFORMATION from MIYAGI

〔宮城県からのお知らせ〕

01 就職・転職のご相談は「出前ジョブカフェ」へ!

若者の就職支援施設「みやぎジョブカフェ」では、復興支援の一環として、沿岸被災地を含む県内4地域で定期的(月3回)に「出前ジョブカフェ」を実施しています。

面接対策等の就職に役立つセミナーと個別の就職相談が受けられます。また、石巻・気仙沼地域では、出前ジョブカフェ開催日以外にも下記サポートセンターで個別の就職相談を受け付けています。

すべて無料でご利用いただけますので(要予約)、就職活動がうまくいかない、転職しようか迷っている、そんな方はお気軽にご利用下さい。詳しくは、みやぎジョブカフェ及び各サポートセンターへお問い合わせ下さい。

- みやぎジョブカフェ
☎022-217-3562 <http://www.miyagi-jobcafe.jp/>
- 石巻サポートセンター ●気仙沼サポートセンター
☎0120-773-161 ☎0120-215-488



就職支援セミナー風景
キャリアコンサルティング(個別就職相談)風景



開催日程等、詳しくはこちら

02 「岩手県・宮城県・福島県 農業農村復旧復興展」

平成29年9月4日(月)から8日(金)に農林水産省「消費者の部屋」で「岩手県・宮城県・福島県 農業農村復旧復興展」を開催します。

東日本大震災から6年半が経過した3県の農業農村の復旧・復興の歩み、現在の復旧状況、3県に派遣応援いただいた職員の皆さんの活躍状況、復興に向けた新たな取組等を紹介するパネルの展示を行います。また、アンケートに回答いただいた方に3県それぞれの県産米をプレゼントする予定です。

- 県農林水産部農村振興課
☎022-211-2863

参考:農林水産省「消費者の部屋」スケジュール
<http://www.maff.go.jp/heyate/tenzi/attach/pdf/index-5.pdf>

MEDIA INFORMATION

みやぎ復興情報ポータルサイト
みやぎ復興情報ポータルサイトはコチラから!
<http://www.fukkomiyaagi.jp>

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を公開しています。復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取り組みなどをブログで発信します。

最新情報を
ブログで!

今月のブログピックアップ

いわたかれん
復興フォト
岩田 華伶
これまでの被災地訪問は80回を超える岩田さん。「写真」に想いを込めて、月1回被災地の状況を発信しています。今回訪れたのは岩沼市。かつて住宅が立ち並んでいた跡地にいる「岩沼ひつじ」を訪れました。

宮城発!
元気と食の最新情報
一般社団法人 IkiZen
震災復興に軸足を置き、被災地の企業の販路開拓や商品開発、広報活動支援などを行っています。

詳しくは、「みやぎ復興情報ポータルサイト」内の「NOW IS.復興レポート」をご覧ください。

- いまを発信!復興みやぎ SNS「いまを発信!復興みやぎ」では、取材チームが見た被災地のいまを発信しています。皆さまからの投稿もお待ちしております。ハッシュタグ「#fukkomiyaagi」をつけて、撮影した画像をお寄せください。
- NOW IS.メールマガジン NOW IS.の発行日(休日のときは翌平日)にメールでお知らせします。 **NOW IS.メールマガジン** で検索して登録!

取材こぼれ話 Voice from STAFF
オフィシャルおみやげ
旧親慶丸商店内で、ふと目に止まったポップなパッケージ。よく見ると昨年NOW ISで取材した「のり工房 矢本」の「塩のり」。取材以来このシリーズの「梅塩」味の虜になり、見つけるたびに買い漁っています。今回Reborn-Art Festivalのオリジナルパッケージになりました。そのほか「しおがまの藻塩」など、「オフィシャルおみやげ」が、限定パッケージ商品として販売。見かけたらぜひ手に取ってみてください。

Vol.
16
August, 2017

ナウイズ
毎月11日発行

宮城は現在も
現実に
立ち向かう。

NOW IS.



蛤浜プロジェクト

亀山貴一

浜に根付いて 世界に向かう。

石巻市街地から、半島の曲がりくねった道を車で約20分。林を抜けた先に、ぽっかりと現れる小さな集落が、蛤浜はまぐり浜です。穏やかな波音と木々の葉擦れの音。人口は、わずか2世帯5人。静けさを絵に描いたようなこの浜は、今、カフェ好きの人たちの間で大きな話題となっています。築100年の民家を改築した海の見える

「はまぐり堂」。訪れた人は4年で5万人を突破しました。

「はまぐり堂」は、亀山貴一さんが推進する「蛤浜プロジェクト」の中心施設としてつくられました。なぜこの地でカフェを始めようと思ったのか。今回は、そのきっかけ、カフェに込める想いを、亀山さんにお聞きしました。